多文化をささえる人びと

子どもたちの小世界

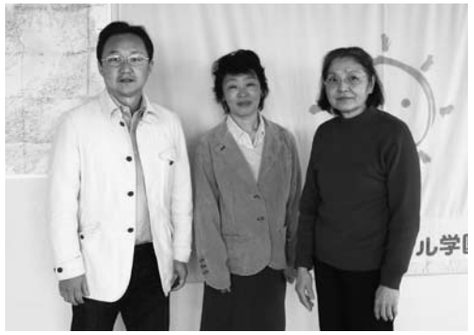
ブラジル人学校のいま

一時は九〇校にも達したブラジル人学校はいま窮地に立たされている。昨年末からの経済不況のあおりで学校に行けない子どもが増えているためである。ブラジル人の子どもたちが生活の中心であった学校からきりはなされ、行き場のない空虚な時間を過ごさざるをえないなか、必死で子どもたちを守ろうとする人びともいる

庄司（しょうじ） 博史（ひろし）
民博・民族社会研究部
言語学・言語政策論。２００４年に特別展「多みんぞくニホン」を企画した。近年は移民言語や多民族化の諸現象に関心をもっている。共・編著書に『多みんぞくニホン』（２００４年）、『日本の言語景観』（２００９年）など。

ブラジル人学校ということばを聞いたのは一〇年ほど前であった。

確かに日系ブラジル人が一九九〇年代に増加しはじめ、労働者として各地で集住地を形成していることは知ってはいた。しかし、そういう彼らが同伴した子どもたちの学校を設立したという情報は、私には唐突で、自分の移民問題についての不勉強を実感した一瞬であった。


左から渡守さん、教師のナカザワさん、園長のサトウさん。後ろはアジア・ブラジル学園旗

当時、まだ数か所といわれていたブラジル人学校はその後、情報が入るたびに一〇校、三〇校と増加し、最終的には九〇校にまで達したというわさも届いた。

滋賀県のブラジル人学校

やがて、そのような学校が滋賀県にもできたと耳にした。関東や東海地方にくらべてブラジル人が比較的少なかった関西にも、彼らが定着しはじめたことの表れであった。

そして三年前の二〇〇六年、ようやく私が訪問する機会をえたサトウ学園も、そのような学校のひとつであった。琵琶湖南部、幹線道路沿いの自動車関連工場と畑に挟まれた二階建てプレハブ校舎には、学年別クラスと数十人の子どもたちがひしめきあっていた。かつて訪れたことのある群馬県のブラジル人学校とほとんどかわらない雰囲気が漂っていた。

子どもたちの快活さ、ポルトガル語とブラジル方式で運営されるクラスに妙な解放感を覚え、私自身はまだ知らぬブラジル文化の一端を体験した気分になった。サトウ・ミドリ園長が七人の先生とともに立ち上げたばかりのサトウ学園には元気があふれていた。

しかし、そのサトウ学園は、いまはもう存在しない。流動性の高い労働市場とともにブラジル人は頻繁に移動し、親が四万円余りの学費を払えず通学を中断せざるをえない子どもたちも多い。制度的に私塾扱いのため、自治体の援助や免税措置もないブラジル人学校は恒常的に不安定な経済基盤にあるのだ。

ブラジル人学校の試練

ところが、サトウ学園は実質的にはなくなっていなかった。昨二〇〇八年の春、経営が行き詰まったサトウ学園は、それほど遠くないところで、「アジア・ブラジル学園」として存続していた。サトウさんも園長として働いていた。

経営を引きついだのは渡守貴之さんである。渡守さんは日系ブラジル人ではない。十数年来、ブラジル人の人材派遣業に携わっていたことから、子どもたちの学びの場を確保しようと事業を引き受けたのだ。渡守さんは、かつてある事業者が潰物工場をブラジル学校用に改築しようとしたものの、中断したままになっていた二階建ての建物を借りうけた。

二階には、いくつもの教室にくわえ図書室、音楽室、食堂、それにパソコン・ルームなども備えた。保育児もいれると八〇名もの子どもたちがここに通い、遠方からも何台もの車が子どもたちを送迎するほどであった。子どもたちを朝から晩までありかるブラジル人学校は、教育の場であるばかりか、子どもたちには生活の中心であり唯一の世界であった。

親たちも学校のさまざまな行事に参加し、経営面でも順調にすすむかにみえた。

しかし、二〇〇八年後半にはじまった世界的な不況のなかで状況は一変した。多くのブラジル人労働者が職場を失った。帰国する人、授業料が払えない人たちが続出し、ブラジル人学校は生徒数が激減したため、どのブラジル人学校も経営は瀕死の状態にあるという。

アジア・ブラジル学園も子どもたちは二〇名近くに減った。ブラジル教職免許をもつ先生は、八名から三名となった。突如学校をやめた子どもたちの多くは行き場もなく、日本の学校にも通っていないらしい。子どものいない教室が、そのすべてを物語っていた。

去年までのクラスの子どもたちの多くは転出してしまった

子どもたちのために

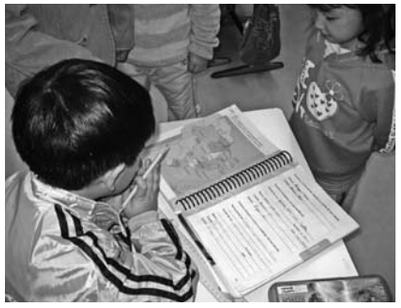
ポルトガル語のみで、ブラジルのカリキュラムにしたがうブラジル人学校のあり方にはさまざまな意見がある。各地の集住地域で自己完結型のコミュニティを形成し、日本社会から距離をおきがちのブラジル人は、日本語学習や情報の面で自らの可能性をせばめているという指摘も存在する。その一方で、同化的で画一的な日本の学校になじめず、いつの日か帰国する可能性を信じて子どもたちにポルトガル語とブラジルの文化を身につけさせたいと考える親も少なくない。日本の学校でことばや文化摩擦、時にはいじめでなやむことより、多少無理をしてでもブラジル人学校で子どもを自由にそだてたいと思うのも無理はない。

私がアジア・ブラジル学園を訪れた日、渡守さんは朝から県の国際課の担当者と窮地にある滋賀県内の四つのブラジル人学校への援助折衝に奔走していた。自治体、教育委員会、メディアに、一人でも多くの子どもたちが一日でも長く学校にとどまれるよう訴え続けている。

カリキュラムはほぼブラジルの学校にそっている

ご本人に人権問題の関心があったとはいえ、私財をなげうってまで外国人の教育問題に関わるとは思っていなかったはずだ。派遣業のため、「営利目的と勘ぐられるのが口惜しい」という。それでもようやく、自治体から給食費と施設費の援助がうけられそうな気配だ。

半年もの学校生活の空白は、子どもたちの心と学力にどれほど大きな負担をのこすだろうか。どんな事情にせよ、行き場のない子どもたちに罪はない。「しかし、子どもたちにとっては、いまが非常事態なのです」。そういう渡守さんのことばと、ポルトガル語で教科書の内容を懸命に説明しようとしてくれた子どもたちの明るい表情が、帰路についた私の脳裏に、幾度も交互に浮かんでは消えた。

子どもたちの多くは日本語がほとんどできず、日本の子どもと遊ぶ機会はほとんどない

ポルトガル語の教科書を広げる子ども